県営圃場整備事業（伊那市手良地区）

山の田遺跡緊急発掘調査報告書

伊那市教育委員会
上伊那地方事務所

序

手良地区は以前から多くの遺跡が知られており、文献にも「弓良郷」としての記載が残されており、古代史上重要なところであります。特に、山の田遺跡付近一帯は、手良郷の中心地であると推定されている福島地籍に最も近い場所であります。

以前、開田の折りに土器が出土したと地域住民が語ってくれました。一部は現在、手良小学校に保管されています。

今回の調査も、埋蔵文化財保護のための記録保存を目的としており、緊急発掘調査を実施致しました。調査の結果は本文中に詳述してあるように、平安時代竪穴住居址一軒、弥生前期竪穴一基、時期不詳竪穴一基が確認されました。山の田遺跡の存在する伊那市手良八ツ手地区内での発掘調査は過去二回の調査と今回の調査で三回目であります。これらの調査を通じて、八ツ手地区の古代史解明の手掛りとなり、また、調査結果をまとめた本書から埋蔵文化財の大切さ、保護の必要性をご理解いただければ幸甚に存じます。

最後に、調査にあたりまして、多大な御理解と御協力、御指導を賜わりました関係諸機関の皆様に衷心より謝意を表して序といたします。

昭和六十三年三月

伊那市教育委員会
教育長　宮下安人

凡例

一、今回の発掘調査は県営圃場整備事業に伴なう、土地改良事業で第二次緊急発掘調査にもとづく報告書とする。

二、この調査は県営圃場整備事業に伴なう緊急発掘で、事業は長野県上伊那地方事務所長の委託を伊那市教育委員会が受託し、さらにそれを発掘調査団に委託した。

三、本調査は、昭和六十二年度中に業務を終了する義務があるため報告書は図版を主体とし、文章記述もできるだけ簡略にし、資料の再検討は後日の機会にゆずることにした。

四、本文執筆者は、次のとおりである。担当した項目の末尾に氏名を記した。　飯塚政美

◎図版作成者

◎遺構及び地形　小木曽　清　飯塚政美

◎土器及び石器実測図　小木曽　清　飯塚政美

◎写真撮影

◎発掘及び遺構・遺物　友野良一　小木曽　清　飯塚政美

五、本報告書の編集は主として、発掘調査団があたった。

六、遺物及び図面類は伊那市考古資料館に保管してある。

七、事務局は伊那市教育委員会社会教育課に置いた。

一　発掘調査の経緯

手良地区の土地改良事業は昭和五十二年度に中坪地区で最初に着手致しました。この事業に伴なって砂場遺跡の発掘調査を実施致しました。昭和五十四年度には中坪区上村部落の水田一帯が土地改良事業区内に含まれるとのことで、事業実施前に施工地区内に存在する上村遺跡の緊急発掘調査を行いました。昭和六十年度事業地区内は八ツ手、蟹沢両地区であり、前地区の中には堤林・島崎両遺跡が後地区には桜林・ワランベ・入林遺跡が含まれており、秋から初冬にかけて発掘調査を実施致しました。昭和六十一年度事業地区内は野口地区であり、この一帯では堂垣外・向田・鳴神・竜の沢遺跡・山伏塚古墳が含まれており、堂垣外遺跡は夏場に発掘調査を実施した他の四遺跡は秋から冬場にかけて発掘調査を行なった。昭和六十二年度は八ツ手地区の山麓地帯が圃場整備地区内に入っており、これに伴なって山の田遺跡緊急発掘調査を十月中旬～下旬にかけて実施した。

昭和六十二年九月七日　上伊那地方事務所長と伊那市長との間で『埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約書』を締結し、さらに、昭和六十二年九月十四日　伊那市長と発掘調査団長友野良一との間で『埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約書』を締結し、ただちに、発掘準備にとりかかった。

二　調査の組織

山の田遺跡発掘調査団

団　長	友野　良一	日本考古学協会会員
副　団　長	御子柴泰正	長野県考古学会会員
調　査　員	飯塚　政美	日本考古学協会会員
〃	小木曽　清	宮田村考古学友の会会長

［作業員名簿］　柴佐一郎　池上大二　上島正延　酒井とし子　大久保富美子　埋橋程三　建石紀美子　伊藤　勝　伊藤菊次　蟹沢治江（敬称略順不同）

三　位　置

山の田遺跡は、長野県伊那市手良八ツ手竹の内部落の北端、松尾社の東側に所在する。遺跡地までの道順は次の通りである。ＪＲ伊那北駅で下車し、東側へ三百ｍ程行くと南北に天竜川が流れているこの川にかかっている二条橋を渡って、直進して二百ｍ程東へ行くと、三叉路の交差点があり、ここで左折し、北に向って直進していくと、上牧、野底、福島の順で、集落が道路をはさんで、東、西に点在している。福島集落の北はずれに東から西へ瀬沢川が流れており、この川をはさんで南側は伊那市福島、北側は箕輪町福与となっており、いわば行政体の境界線となっている。箕輪町卯ノ木集落の南端の信号機のある交差点を右折して、約一㎞程行くと、八ツ手部落がある。遺跡地は松尾社の東側、北から南傾斜の強いところに展開し、水田、桑畑に利用されている。

四　地形・地質

山の田遺跡は八ツ手川に面した北から南へ急傾斜する山麓扇状地面の末端部に位置し、標高六五〇ｍ～六七〇ｍ位を測る。先端部で

八ツ手川との比高差は五m位を測る。八ツ手川は途中で瀬沢川と合流し、最終的に天竜川に注ぎ込む、いわば天竜川の支流である。

次に、遺跡地の地質を考えてみることにする。本遺跡地は前述したように山麓扇状地の末端に位置しているために後方からの押し出しによる堆積土が厚く覆っており、おそらく、ローム層に達するまでには平均的にみて、表土層面から二mを越す下層面まで掘らなければならない。堆積土の成因が押し出しによっているために、大部分の土層に砂質分が多く含まれていた。

五　周辺遺跡の歴史的環境

山の田遺跡を含めた手良地区の歴史的環境の概略を堤林・島崎遺跡緊急発掘調査報告書より記すと次のようになる。

手良地区は伊那市東部地区に含まれ、天竜川左岸地域にあたっている。この地域は天竜川による河岸段丘と、天竜川の支流である三峰川と棚沢川によって形成された河岸段丘と、扇状地が存在し、その上を厚いローム層が覆っている。

次に遺跡分布の状態を考えてみよう。棚沢川周辺に濃密な遺跡の点で結ぶ分布帯が広がっている。手良の名が文献上に初めて登場するのは平安時代承平五年（九三五）倭名類聚鈔からである。この文献のなかに手良郷の存在が実証されている。中坪区の北端、竜ノ沢川の上流に大百済毛、小百済毛という地名が現存しており、この場所付近に古代の弓良公と称する帰化人が居住していたと伝承されている。手良に散在する遺跡数は、約五十ケ所に近い数値を示し、そのほとんどが棚沢川によって形成された河岸段丘面、扇状地面に存在している。棚沢川は伊那山脈鉢伏山（一四五五m）に源を発し、全長約九kmを流れて、福島区で、天竜川に合流する。

手良における縄文早期遺跡としては浜弓場、所洞、ワランベ、松太郎窪があげられる。縄文中期の遺跡として所洞、辻垣外、地神原、宮の平、東松、鳴神、狐垣外、松太郎窪等々があげられ、縄文晩期には火葬墓とみられる野口遺跡がある。南垣外からは平安時代の灰釉陶器長頸瓶と人骨が出土した。南垣外から福島地籍まで約一・五kmの広い一帯は手良郷の中心地として考えられており、そのなかで最も注目されているのが福島遺跡である。

笠原堂垣外遺跡からは古式土師器の良好なセットと住居址が発見され、また、かっては、矢塚、山伏塚の古墳が存在していたが、現在は消滅している。山伏塚には石棒や石製品を八～九本立てて、雁高大明神として祀られ、かなりの信仰を集めていたと伝えられている。浜弓場遺跡の南側にある貯水用堤造成の時に、多量の人骨が出土したと伝えられている。

前回の発掘調査を実施した堤林・島崎遺跡付近には中世・近世に関連した城跡、神社、堂が存在しているので、それを記してみる。（登内の城、小松の城（北側は八ツ手川が崖下を流れ、この川は屈曲し、西側に流れ、南側は自然の沢。平山式館城単郭雑形、大手は東側、小松某の城主と伝承されている。城内に稲荷社を祀る。碑があり、その銘文は次のようである。「寿永三歳八月朔日、霊山寺伝大居士、国家一翁常夏信士」）

寺院としては真宗寺（有住）、竹之内薬師堂（無住）、宗明寺

（無住）がある。神社としては、松尾社、神明社がある。

山の田遺跡

一　発掘調査

昭和六十二年十月十三日（火）　晴　伊那市考古資料館より発掘器材を手良の現場へ運搬する。テントを南北に細長く建てる。一張りでは手狭になるので西側にシートを張って道具置場とする。

昭和六十二年十月十四日（水）　晴　本日より発掘調査を開始する。現場で草刈りを実施し、ところどころにグリットを決めて掘る。

第１図　位置及び遺跡分布図

遺跡の名称

①沢　山　②ヨキトギ　③蟹沢桜林　④ワランベ　⑤入　林　⑥大　上　⑦狐垣外　⑧鳥ノ宮　⑨辻垣外　⑩矢　塚　⑪野口畑　⑫金　山　⑬竜の沢　⑭鳴　神　⑮山状塚　⑯丸　山　⑰向　田　⑱堂恒外　⑲東　松　⑳古八幡　㉑鍛治垣外　㉒中　原　㉓石見堂　㉔二十平　㉕地神原　㉖小萩原　㉗大百済毛　㉘小百済毛　㉙近　洞　㉚上　村　㉛社宮地原　㉜宮の平　㉝砂　場　㉞清水洞　㉟郷の坪　㊱柿の木　㊲六道原　㊳野　口　㊴下手良中　㊵大　原　㊶松太郎窪　㊷南垣外　㊸角　城　㊹垣　外　㊺辻西幅　㊻島　崎　㊼堤　林　㊽山の田　㊾神手原　㊿日向畑　(51)笠原堂垣外　(52)堤　下　(53)林　窪　(54)菅　窪　(55)富士塚　(56)古屋敷　(57)城　山　(58)浜弓場

調査地区は北から南へ傾斜していた。台地の中央付近に多量の土師器・須恵器が出土したので付近を拡張する。

昭和六十二年十月十五日（木）　晴　前日、拡張した部分が遺構となった。この遺構は南側の中央付近にカマドを持つ平安時代の住居址となった。割合に住居址掘り込み面まで浅かったので、後世の攪乱によって、カマドの石は大部分破壊されてしまって、わずかに焼土が残存しているだけであった。これを第一号住居址と命名する。

昭和六十二年十月二十一日（水）　晴　第一号住居址の西側に竪穴が二基検出され、これを北側のを第一号竪穴、南側のを第二号竪穴とし、その掘り下げを開始する。夕方までにほぼ終了する。

昭和六十二年十月二十二日（木）　晴　第一号住居址、第一号竪穴、第二号竪穴の完掘を済せ、写真撮影を終了する。

昭和六十二年十月二十三日（金）　晴　第一号住居址、第一号竪穴、第二号竪穴の実測をする。

昭和六十二年十二月～昭和六十三年一月　図面の整理、原稿執筆、報告書の編集

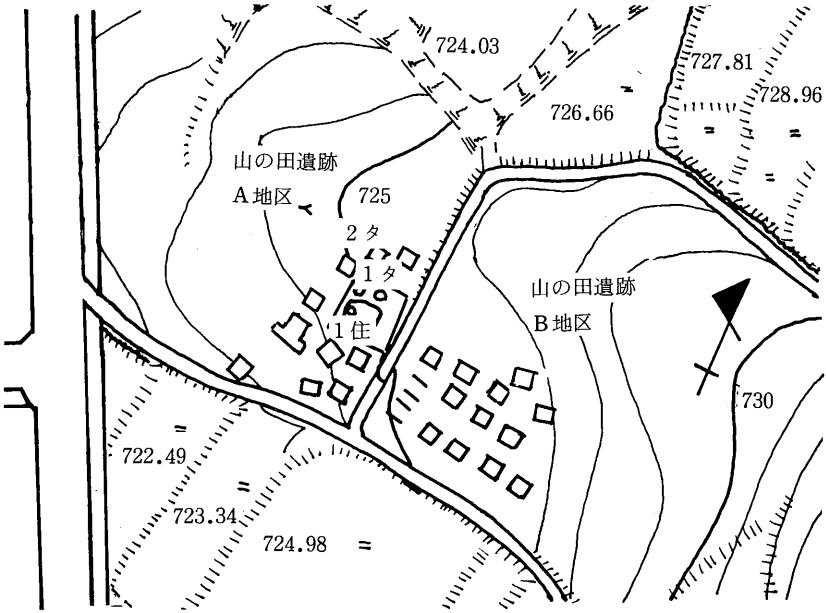
昭和六十三年二月　報告書を印刷所へ送る。

昭和六十三年三月　報告書を刊行する。

（飯塚政美）

二　遺　構

今回の調査で検出された遺構は平安中期竪穴住居址一軒、弥生前期竪穴一基、時期不詳竪穴一基であった。前述したように南傾斜の強い扇状地であったために、わずかな遺構が検出されるに留まった。小単位の集落存在が裏付けできるのによい事例となろう。



第1図　遺構及びグリッド配置図（1：1,000）

（1） 第一号住居址（第2図・図版5）

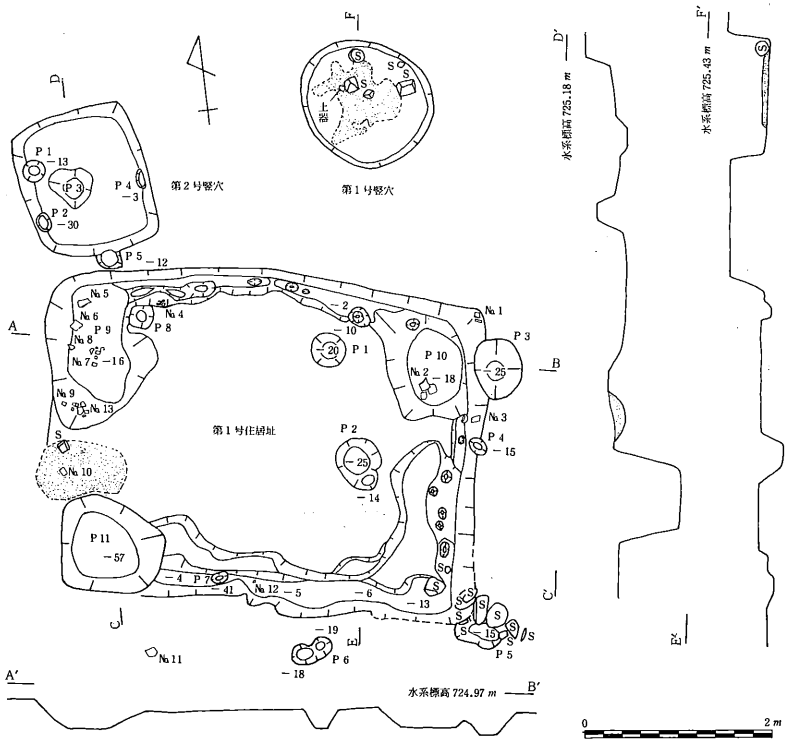
発掘調査地区では最南東部に位置し、本住居址の北東部には第一号竪穴、北西部に第二号竪穴がそれぞれ検出された。現況は荒畑となっていた。表土面から六十cm位下った砂質混合ローム層を掘り込んだ竪穴住居址で、平面プランは東西にやや長い隅丸長方形を呈する。

規模は南北三m五十cm位、東西四m五十cm位を測定できる。基盤が北から南への傾斜のために北壁はやや高くて三十五cm位、南壁は低く、わずかに数cmを測るだけであった。壁面はやや外傾し、壁面に細礫の露出が顕著であった。床面は大般水平で堅くなっていた。カマドは西壁中央部付近にあったものとみえて、多量の焼土が堆積していたが、カマドの芯になると思われる石や粘土は全く確認されなかった。おそらく、後世の耕作による撹乱によって破壊されたのであろう。

四壁面直下に蛇行しながら周溝が廻っていた。このような状態であったために、底部は浅くタライ状を呈しており、周溝としてのできばえはあまり良好ではなかった。

主柱穴は四隅に存在し、やや大き目で、さらに断面はタライ状を呈していた。補助穴も各所にみられた。

遺物は割合にかたまって出土したので、第2図に表示したように通し番号にのもとに採集した。それによると、主体は土師器で、須恵器、若干、灰釉陶器の出土があり



第2図　第1号住宅居址・第1～2号竪穴実測図

従って、平安時代中期頃の住居址となろう。

第一号竪穴（第2図・図版6）

本遺構の南側には第一号竪穴、西側には第二号竪穴が検出されている。表土から五十cm位下った砂質混合ローム層を約四十cm掘り込んで構築した竪穴で、直径一m三十cm位でやや楕円形状を呈する。壁面は垂直気味で、割合にしっかりとしていた。床面は大般水平であり、堅くなっていた。同面から十cm位の厚さで、多量の焼土や木炭が検出され、さらに、焼土塊の中に床面に密着して数個の焼石があった。

焼土塊の下部から弥生前期終末の条痕文系土器の細片が出土した。出土層位からみて、本竪穴は前述した時期と考えてよかろう。

第二号竪穴（第2図・図版6）

本竪穴は第一号住居址の北西隅に検出された遺構である。表土面から五十cm位下った砂質混合ローム層を二十五cm位掘り込んで構築してある。南北一m五十五cm位、東西一m三十五cm位の規模で、平面プランは隅丸方形状を呈する。壁面はやや外傾気味、床面は中央へ行くに従ってやや傾斜し、中央部に小ピットが存在している。その硬度は少なかった。

小ピットが床面中央部に一ケ所、西壁直下に二ケ所、南壁中央部付近と、東壁中央部付近にそれぞれ一ケ所あるが、配列が不規則なためにその実態は把握できない。遺物の出土は全くなく、その時代決定はできない。ただ、周辺の状態とも加味して考えてみる必要があろう。

（飯塚政美）

三　遺　物（第3～7図・図版8）

（1）　土　器　（第3～5図・図版8）

今回の発掘調査で出土した土器片は縄文早期土器、弥生前期土器、平安時代の土師器・須恵器・灰釉陶器であった。第3図（1～7）は縄文早期末葉の土器片で、グリット内より出土している。（1）は、やや扁平に近い楕円形の押型文で、横列状に配されている。多量の雲母や繊維を含み、赤褐色を呈し、焼成は中位である。胎土の含有物からみて、押型文系では最終末期に位置づけられるだろう。

（3～8）は胎土中に多量の繊維を含み、茅山系統一派に含まれる土器片である。（2～5）は斜縄文地に竹ベラによる沈線や刺突文によって幾何学的文様を構成している。四片とも赤褐色を呈し、焼成は中位で、少量の長石、雲母を含む。鵜ヶ島台式と思われる。内面には擦痕が横走している。

（6～7）は絡縄帯圧痕文が顕著なもの。三片とも多量の雲母、長石を含み、黒茶褐色を呈する。子母口式に属していると思われる内面に、わずかに条痕文が横走している。

（8）は第二号竪穴のフク土上層面より出土した縄文中期初頭の土器片である。破片上部に低い隆帯を貼り付け、その上にC字状の爪形文をある程度間隔を保ちながら施してある。破片中・下部は細沈線による組み合わせによって文様構成をしてある。赤褐色を呈し、焼成は良好で、多量の雲母を含んでいる。縄文中期初頭梨久保式に位置づけられると思われる。

第4図は第一号竪穴床面に存在した焼土内より出土した土器片である。口縁径三十三cm位を測る。口縁部はわずかに波型を呈する。

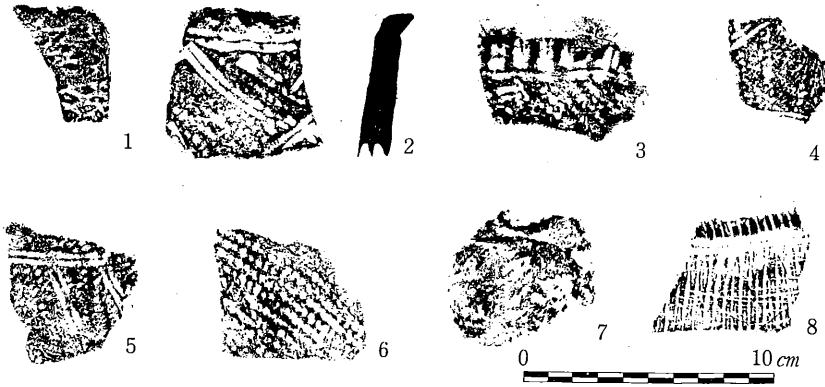
口縁は斜目状に外反し、口頸部はややつぼまり、胴部はややふくらみ気味を呈する。

器厚は6mm程度と中厚手に属している。外面文様は口縁上部から胴部上部にかけて条痕文が右下りに斜走している。胴下部からはやや間隔をおいた条痕文が横走している。

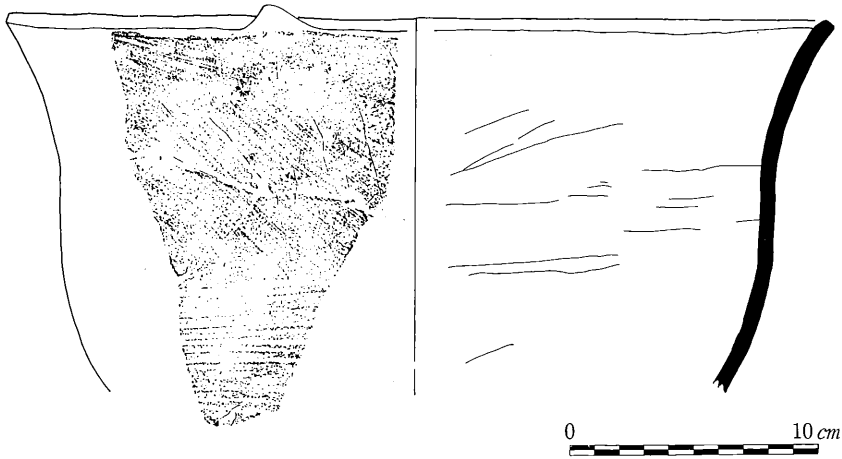
内面にはわずかに擦痕を認める。赤褐色を呈し、焼成は極めて良好である。

弥生前期終末頃の水神平式と思われる。

第5図（1～4）は第一号住居址より出土。（1）は土器出土No.3である。口縁径十七・五cmを、最大胴径十七・二cm位をそれぞれ測る甕型土器である。口縁は、くの字状に外反し、口唇は丸味を呈する。外面に縦位のハケ目が顕著がある。赤褐色を呈し焼成は良好、少量の雲母を



第3図　土　器　拓　影

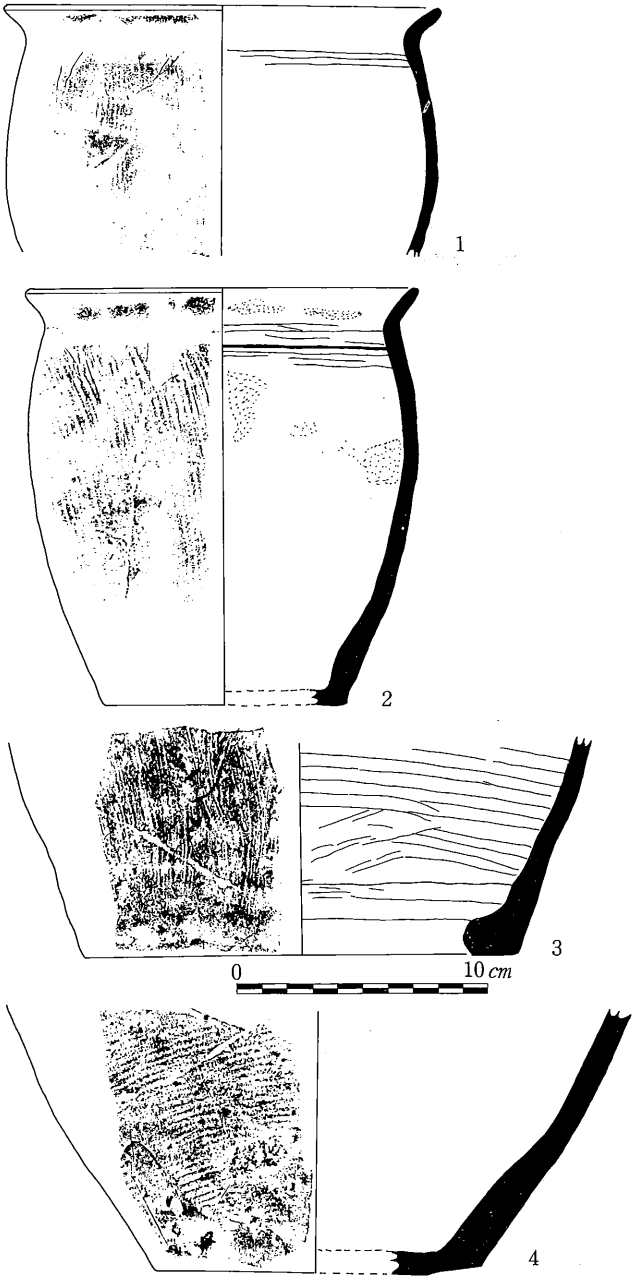


第4図　土　器　実　測　図

含んでいる。（2）は土器出土番号No.1である。口縁径十五・七cm最大胴径十五・五cm、底径九・七cm、器高十六・七cmを有し、口頸が大きく、くの字状に屈曲し、口唇は丸味状を成す甕型土器である外面には刷目が斜位に、内面には口頸部付近に刷目が横位にそれぞれ施されている。赤褐色を呈し、焼成は良好で、多量の雲母を含みチカチカ輝いている。

（3）は覆土中により出土。底部破片である。内・外面ともに刷目が見事に施されている。外面に黒々と炭化物の付着がみられる。赤褐色を呈し、焼成は極めて良好で、多量の雲母を含んでいる。

（1～3）は平安時代中期国分式の土師器である。



第5図　土　器　実　測　図

（4）は覆土出土の須恵器甕の底部片である。外面に叩き目が丁寧に施されており、しかも、わずかに自然釉がみられる。底部の一部に重ね焼の痕跡が認められる。平安時代中期頃の作であろう。

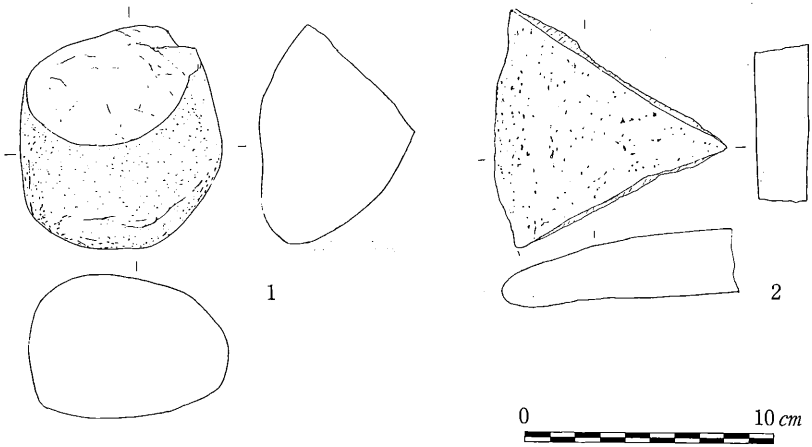
（2）　**石器（第6～7図・図版8）**

第6図（1～2）は黒耀石製の石器である。（1）は石鏃であり凸基有茎で、やや二等辺三角形状に近い。剥離痕は明瞭で、仕上げは丁寧である。片脚を欠損している。（2）は第一号住居址覆土上層より出土の掻器である。刃部は上端と下端に集中し、断面三角形と成っている。剥離は普通である。

第7図の（1）は砂岩質の磨石であり、完全に半割され、上端は欠損している。ところどころに磨痕や敲打痕を認める。同図の（2）は花崗岩の扁平状砥石であり、大部分は欠損してしまっているが現存している部分で、上、下面ともによく研磨されている。

（飯塚政美）

第6図　石器実測図



第7図　石　器　実　測　図

四　まとめ

手良八ツ手地区山麓扇状地上に分布している山の田遺跡を発掘調査した結果について、遺構・遺物について検討を加えてきたが、この章で簡潔的にまとめてみようと思う。

遺構については弥生前期の竪穴一基、時期不詳の竪穴一基、平安時代竪穴住居址一軒である。これらの遺構の実態について述べる。

第一号住居址は平安時代の竪穴住居址で、隅丸方形プランを呈しその規模は南北三*m*五十*cm*位、東西四*m*五十*cm*位を測る。カマドの芯になると思われる石や粘土は全く確認されなかった。おそらく、後世の耕作による攪乱によって破壊されたと思われる。壁面直下に周溝が蛇行状にめぐっていた。

第一号竪穴は弥生時代前期終末期の竪穴である。直径一*m*三十*cm*位の規模で、やや楕円形状を呈する。床面上に多量の焼土や木炭が検出された。

第二号竪穴は時期不詳であった。南北一*m*五十五*cm*、東西一*m*三十五*cm*位の規模で隅丸方形状プランを呈している。床面上にピット列が配されている。

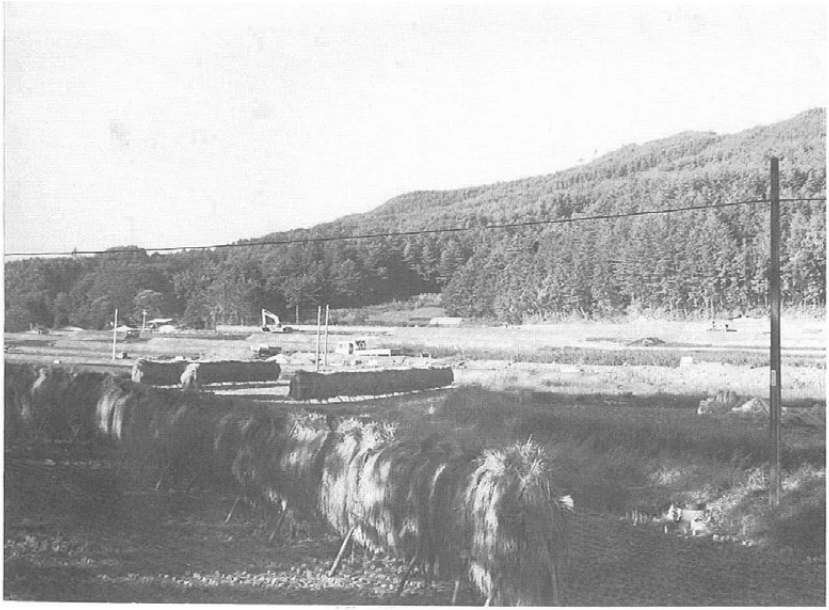
遺物について土器からみてみよう。繊維を含んだ楕円押型文が出土している。これは細久保式に編年づけられると思われる。広義に考えられている茅山系統土器片は七片出土し、そのうち鵜ケ島台式は四片、子母口式は三片であった。梨久保式土器、水神平式、平安中期の土師器、須恵器、灰釉陶器も出土した。土師器は国分式、須恵器は須恵器Ⅲ、灰釉陶器は猿投産であった。石器としては石鏃、磨石、砥石が出土している。

全般的にみて、縄文早期の遺跡は標高の高い所に存在したという説が一般的であるが、それを実証してくれた。また、弥生前期の段階で高地性集落存在を裏付けてくれるのに良い遺跡となろう。

平安時代の竪穴住居址検出は弓良卿の存在を強調せしむるであろうし、また範囲把握に役立つと思われる。

（飯塚政美）

図版１　遺跡地を南側より眺む

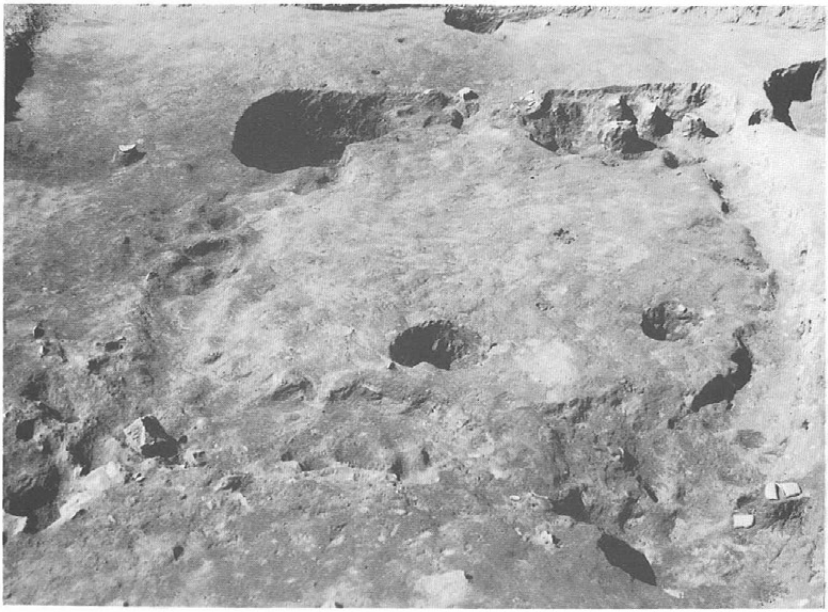


図版２　遺跡地を東側より眺む

図版3　遺　跡　地　近　景

図版4　発　掘　風　景

遺　構　配　置（東側より眺む）



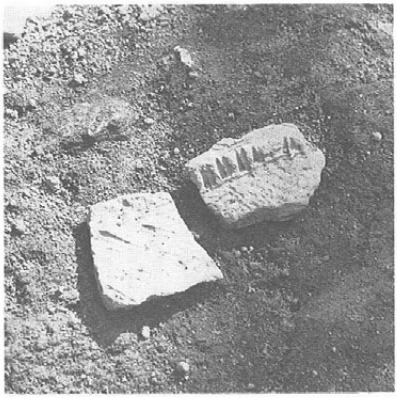
第１号住居址
図版５　遺　構

第　1　号　竪　穴

第　2　号　竪　穴

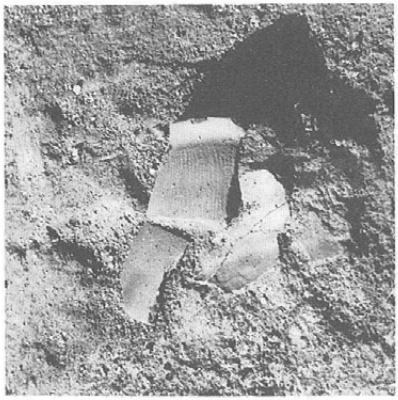
図版6　遺　　構

第１号住居址カマド

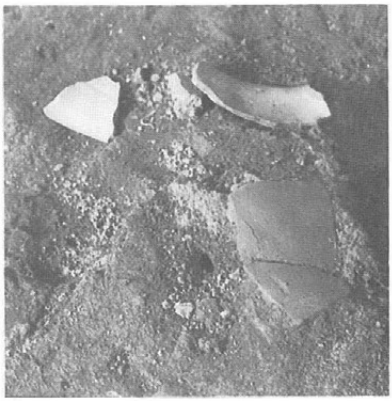


土器出土状況

土器出土状況

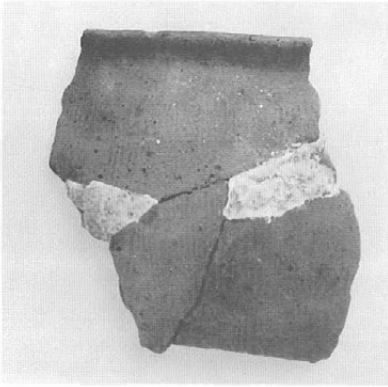


土器出土状況

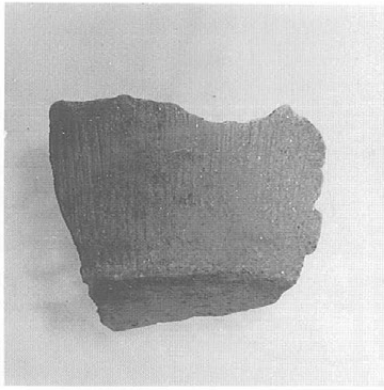


土器出土状況

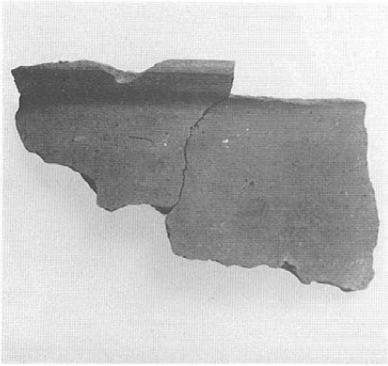
図版７　遺構及び遺物出土状況



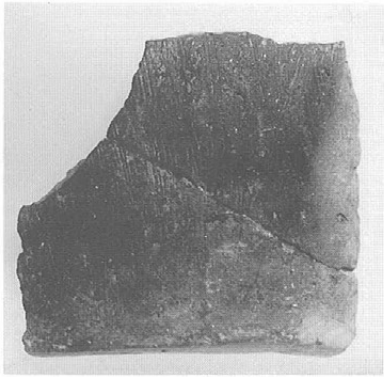
出土土器



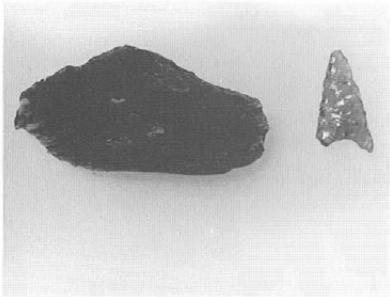
出土土器



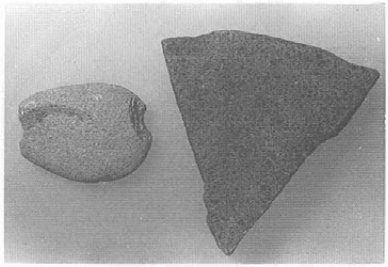
出土土器



出土土器



出土石器



出土石器

図版8　出　土　遺　物

山の田B遺跡

一　発掘日誌

昭和六十二年十月二十六日（月）　晴　第一号住居址より山道をへだてた北側へグリット掘りをところどころへ入れてみるが、遺物及び遺構の存在は全くなかった。

昭和六十二年十月二十七日（火）　晴　本日をもって、山の田遺跡関連の発掘調査は終了である。テントをとりこわして、伊那市考古資料館へ運搬する。

昭和六十二年十二月～昭和六十三年一月　図面の整理、原稿執筆報告書の編集をする。

昭和六十三年二月　報告書を印刷所へ送る。

昭和六十三年三月　報告書を刊行する。

二　遺　構

遺構の検出は全く無かった。

三　遺　物

遺物は何も出土しなかった。

四　まとめ

山の田B遺跡は山の田遺跡と農道を境にして北側にある。山の田遺跡では相当量の遺構、遺物の検出がみられたが、山の田B遺跡は何も全く検出されなかったので、まとめらしきものは記述できない状況であります。

（飯塚政美）

山の田遺跡緊急発掘調査報告書

昭和63年３月16日　印刷

昭和63年３月18日　発行

発行所　　長野県伊那市教育委員会

印刷所　　中　山　印　刷　所